
唯(ただ)、一人

星河七海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

唯^{ただ}、一人

【Nコード】

N8737H

【作者名】

星河七海

【あらすじ】

ちよつと前まで、それが日常だった。道を歩けば、声を掛けられるのも当たり前。何も求めず、また、本気にもなりきれず、女に不自由のない生活を送っていた。そんな矢先の出会い。俺のすべてを180度変えたのが彼女だった。

ちよつと前まで、それが日常だった。
日曜日、俺が幼馴染で親友の木田 護と歩いてると、女に「遊輝ゆうき」
と呼ばれた。

いきなり腕を絡ませ、上目遣いと甘えた口調で擦り寄ってきた彼女は、俺に聞いた。

「ねえ、最近全然連絡くれないじゃない。もしかして、彼女でもできたの？」

「彼女……。っーか、お前誰だっけ？」

次に飛んできたのは、予想通りというか 清々しいほどの平手だった。

ありきたりな捨て台詞を残して去ったと同時に、それが逆ナンしてきた自分の彼女だったことに、ようやく気付いたのだった。

喫茶店に入ってから、痛々しく赤くはれた片頬を見て、一緒に居た護が感心して言う。

「自業自得って、いい言葉だよな」

「こんなザマの、親友に向かつていう言葉がそれかよ」

俺は口元を引くつかせて、護にそう文句をこぼした。

「だって、今までのお前の悪行見てきたし」

「悪行って……」

「うわっ、自覚ねえのかよ。おそろしー奴」

俺がいつ悪行したんだ！と突っ込みたくなかったが、身に覚えがなくてもない。なので、ここは保身をはかることにした。

「それにしても、平手なんて久しぶりだな」

「ああ あれ以来だ」

忘れもしない、あの入学式。俺の人生で、あんなに衝撃的なことはなかった。

花びら舞い散る桜並木、女の悲鳴、射るような鋭い瞳、まっすぐな気性。

彼女に出会ったあの日から、俺の中のすべてが変わったんだ。

数ヶ月前。

その日、入学式だというのに俺達は、思いっきり遅刻していた。受付時間は、もう過ぎている。どうせ、今から行っても意味がないので、俺は走るのを完全にやめた。

「おい、本気で遅刻するぞ！早く行くぞ、遊輝」

「えー……いいじゃん。遅れたって」

「馬鹿、入学式だぞ！？初っ端から目を付けられるなんて、もうゴメンだからな！いいか？高校生活こそ真っ当に過ごしたいんだ。でもって、可愛い彼女を作りたい！」

握り拳を作って、どこかに向かって勝手に力説している護を横目に、俺はポツリと呟く。

「それって、後者が本音だろ」

「うるさい、とにかくいくぞー！」

キヤアアアッ

その時、どこからか辺りを裂くような女の悲鳴が聞こえてきた。

「あ、悲鳴」

俺は何事もなかったかのように、冷静にそう言った。だが、隣にいる護はそうもいかない。彼は、何事も首を突っ込む癖があって、意外と紳士な面がある。そして、とてもお節介。だから彼にとって、こういう状況は見過ごせないはず。現に、護は複雑な表情で沈黙しているのだから。

「……」

「ほら、学校行かないのか？高校では真っ当に過ごしたいんだろ？」
ニヤニヤと口元をゆがませ、学校の方向を指差して聞いた。護の答えは、もう決まってる。

護は顔を赤くしながら、悔しそうにこう言った。

「く、くそう。そういうお前は、サボればどうでもいいんだろ！？」

「当然」

俺は、そう言っただけでニヤツと笑うと、護とともに声のした方へと走った。

俺達が辿り着いたのは、小さな公園だった。そこは、噴水とベンチや遊具、砂場などがあるごく普通の公園。その公園の端に女子生徒二人と、柄の悪そうな男が立っていた。明らかに、彼女達はその男に追い詰められていた。遠目からはそう見えた、が、予想とは大きく外れるものだ。

「女一人に何ができるんだ」

男は馬鹿にした表情で、一人の女にそう言った。すると、気の強そうな彼女は、その男を前にして嘲笑って言った。

「これだから嫌よ。女」「かよわい」の方程式が成り立ってるんだから。どーせ、女なんて力でねじ伏せれば、なんとかなると思ってるんでしょ」

「ふん、だからなんだ？」

「……そーというのが気に食わないのよつ。この馬鹿！」

「なんだと!？」

殴りかかろうとする男を止めるために、俺達はすぐさま前に出た。次の瞬間、それは徒労に終わった。彼女は、男の急所を蹴り飛ばし、痛がっているその男の腕を持ち上げて、一本背負いを繰り返した。男は再起不能になり、マグロのごとく横たわっている。容赦ない仕打ちに、俺達は憐憫れんぴんの情を抱かずにはおれなかった。

「すげえ」

俺が感嘆の声を漏らすと、護は啞然としながら、呟いた。

「うわあ、遊輝の上をいく奴、まだいたんだ。あ、おい。あの怪我してる子、可愛くないか？」

彼が指で差した方向には、さっきの彼女とは百八十度、性格の違う

女子生徒が腰を抜かして怯えていた。讓、ああいう子が好きだよな。俺は全く興味がないけど。そんな風に思いながらその子を見て言った。

「並、じゃね？並でも上手いけどな」

「寿司かよ！」

予想通りの突っ込みが返ってきた時、気の強そうな彼女は、振り向いていきなり睨んできた。俺は、あまり動じなかったが、内心少しだけ怯んでいた。

「しつかりと聞こえてるわよ、根性無し」

長い黒髪を一つに束ねて、昔の女剣客のように気高く、獣を射るような鋭い瞳を軽く細めて言った。

「……それは俺達のことか？」

「アンタ達以外に誰がいのよ。普通、女子が危険な目に合っていたら、助けるものでしょう？」

「助けなんて」

いらなかったじゃないか、俺がそう言いかけると、彼女はまた睨んで、ぴしゃりとそれ遮った。それから、腰の抜かした彼女の友人の声を掛けた。

「言い訳無用。いつちゃん、立てる？」

「う、うん」

いつちゃんと呼ばれた女子生徒は、こちらを気にしながらも、何とか立ち上がった。それを見届けた彼女は「いつちゃん、行くわよ」と言って、公園の出口に向かった。

「おい」

「……何よ」

もう俺達と喋るのすら不愉快だと言わんばかりの表情を、露骨に出して振り向く。

「お前、面白れえな。俺の彼女にしてやってもいいぜ」

この一言が、彼女の地雷を踏んだらしい。後に、俺の方が彼女に惹かれていくなんて、この時はまだ思いもしなかったのだけれど……。

すると彼女は、花が咲いたように、にこりと笑った。それが最初で最後の笑顔。次の瞬間、人一人軽く殺せそうな鋭い瞳で睨んで、大声で俺を罵った。

「ふざけんな。この世で唯一嫌いなのが、一に軽い男で、二にロクでもない男、三四がなくて、五に馬鹿な男なのよ！全部に当てはまるアンタなんて、問題外よ！外見よくても、中身は最低最悪ね。大っ嫌い！」

「……」

女から、面と向かって強く罵られたのは初めてだった。いつも俺の傍にいた女達は、甘い言葉で俺を落とそうと躍起になっている奴らばかり。自分で言うのもなんだが、昔から女に不自由したことがなかった。だから、こんなにもはつきりと「嫌い」と言われたことがなかったんだ。

「ふん」

言いたいことが全部言えてすっきりしたのか、彼女は鼻で笑った。

「……まあ」

「まだ何か？」

「桜高だろ？名前、教えるよ」

彼女の全てが知りたくなった。同じ学校みたいだから、ここで別れることはないと思うが、彼女との繋がりが欲しかった。嫌われてても、別にいい。とにかく、知りたかったんだ。

俺は真剣な面持ちでそう問うと、それを汲んでくれたのか、彼女は少し考えて言う。

「……名乗るのが礼儀じゃなくて？まあ、いいけど。唯、神野 唯よ」

「唯、ね。りよーかい」

「えっ、ちよっ」

有無を言わず、唯の腕をぐいとひっぱって、彼女の唇に自分の唇を重ねた。彼女は、鳩が豆鉄砲を食ったような顔で驚いていた。

でも、それはほんの数秒間だけ。次の瞬間、片頬に燃えるような衝

撃をくらった。俺が彼女を見ると、友人に抑えられながら怒って暴れている。

「ふざけんな、コイツ殺す！」

「唯つてば、落ち着いて！」

「これが落ち着いてられるか!？」

平手で叩かれたらしく、彼女の手の平も赤く染まっている。痛々しいなあ、などと暢気な事を考えながら、舌を出して悪戯っぽく言ってみる。

「ご馳走さん、唯ちゃん」

「貴様！」

ますます激昂する彼女を尻目に、今、思い出したかように言ってみる。

「そうそう、名乗らないなんて礼儀に反するよな。俺の名前は霧山遊輝。以後よろしくな」

それが俺と彼女の出会い。そして 始まりだった。

あの時、唯が欲しいと思った。彼女の心を手に入れたい、本気でそう思ったんだ。

だからこそ、こうして今に至る。

店員が運んできたアイスコーヒーを飲んで、俺達は数ヶ月前を思い返し、話した。

「まあ、過去の清算は大方、済ませたんだろ？」

「もちろん」

問題なさそうに、しれつと言ったが、かなり時間はかかった。それまで、彼女を本気で口説かないで、と彼女の友人から釘を刺されていたのだ。今じゃ、護の彼女なんだけどな。

「あーあ、唯ちゃん可哀相だなあ」

「何で」

「いや、何か……これから大変だなんて」

「確かに、これだからだからな」

さあ、どうやって口説こうかな。考えているだけでも、楽しくなってくる。彼女は一筋も二筋縄でも落ちる女ではない。だからこそ、手に入れるのが楽しみだった。

「そっちのことじゃないんだけど……って聞いちゃいねえ」

そうぼやく護は、深く溜め息を付いて思った。数ヶ月前の遊輝を知っている者は、みんな彼の変わり様に驚いている。人って、出会い一つで、こんなにも変われるもんなのか。護は目の前にいる親友を、ちらりと見た。

唯ちゃんに振り回される、遊輝。

遊輝に振り回される、唯ちゃん。

相反する強烈な二人、そうそうお目にかかれるもんじゃない。

世界広しといえど、この世に唯^{ただ}二人だけ。

この先、どうなるのか楽しみだなあ。

そんなことを思いながら護は、遊輝の様子を見て、ふっと笑みを零した。

N D

E

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8737h/>

唯(ただ)、一人

2010年12月28日14時25分発行